

海音寺潮五郎

江戸城大奥列伝



海音寺潮五郎

江戸城大奥列伝

江戸城大奥列伝

昭和五十九年十二月十日 第一刷発行

定価 一二〇〇円

著者 海音寺潮五郎

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二―二／郵便番号一二三
電話・東京(〇三)九四五―二二二(大代表)
振替・東京 八一三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

◎(財)海音寺潮五郎記念館

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

ISBN4-06-201621-4 (0) (文2)

Printed in Japan

目次

御側御用人と大奥

春日の局の威力

乳人志願

伸びる干渉

硬骨漢・青山忠俊の失脚

家光と三人のおんな

隠密の局

大手門の立往生

臨濟宗の盛行

春日の局の日常

お万の方旋風

行儀作法躰方

智恵伊豆の機転

剃髪常光院の運命

矢島の局の明暗

形見の三百石

丹頂の鶴騒動

しめだされた矢島の局

大奥の腕くらべ

下馬將軍失脚

桂昌院の栄達

綱吉をとりまく女たち

転り込んだ運

女將軍まかり通る

お伝の方と右衛門佐の局

閨閣につながる人々

堀田大老刺殺の謎

光圀の主張

牧野成貞の献妻

右衛門佐の局の下向

桂昌院の信仰

子孫繁栄の祈願

普請をめぐる事件

悪法の背景

狐狸変じて犬となる

訴訟を解決した犬の話
のさばる野獣たち

北の丸殿の登場

女で出世した柳沢

隆光の密法

悪法の恩恵

御台所の博識

捨て児から世に出る

家宣の初政

学問がとりもつ夫婦仲

贈収賄の禁止

左京の方の提言

いなされた御老中

役に立たぬ学問

太閤株上昇

張紙相場のからくり

堂上家の隆盛

当世風出世のかたち

京の仇を江戸で討つ

虎韜の張替え

絵島のとりなし

絵島と交竹院の危険な関係
貨幣改悪の陰謀

内政と外交に関する白書

出る杭は打たれる

「国王」の是非論

御目附師匠番

大岡忠相拔擢される

大奥を巻き込む訴訟

もつれた学問料

味のある幕切れ

大奥女中の影響力

御用商人はびこる

敵討見当はずれ

解説（尾崎秀樹）

装画 佐多芳郎
装幀 熊谷博人

193

207

225

238

256

江戸城大奥列伝

御側御用人と大奥

徳川幕府の政務は、大老、老中が統轄し、それを將軍が主裁したことになるが、内実は必ずしもそうでなかった時代が時々あった。

老中の次席、若年寄わかとしよりの上座に御側御用人おそばごようじんというものがあつた。ふだん將軍の左右に侍り、下命や言上を取次ぐ役目であるが、これが中々の権勢を得て、大老や老中以上の力のあつた時代がある。

將軍への言路であり、下命の取りつぎ役であるから、そのとりなし如何によっては、政治上のことばかりでなく、將軍の人物観まで變つて、老中、若年寄はおろか、大老さえ、將軍の不興をこうむつて、御役御免おやくごめん、減封げんぽう、転封てんぽう、隠居いんきょ、蟄居ちつきょなどの処分を、仰せつかるのだ。

しぜん幕閣の人々は、御側御用人のかくれた権力を怖れて、ひたすら、これに取入ることを努めるようになった。

貞享・元禄の柳沢保明。明和・安永の田沼意次。文政・天保の水野忠成。

これらはいずれも、御側御用人から出頭して、老中、大老と進み、しかもかつて御側御用人であった時代と同様、將軍に近侍して、権力を握りつづけた。

ところが、ここに、この御側御用人にして、なおかつ、心中ひそかに畏怖したものがあつた。大奥の女中等であつた。

表における將軍と同じように、大奥は將軍の正妻である御台所が万事を主宰している。

幕府は、成立のはじめから、制令によって、女子が政治に介入することを堅く禁じていた。御台所もこれを淑徳として、深く自戒していたようで、各時代を通じて御台所が政治に介入した事実はない。

問題は御台所以外の女性なのであるが、これも本来は、たとえば、御台所御附の上臈、中臈と呼ばれる女性等は、召使われる多勢の女中等に対する支配権はあつても、その勢力は、大奥だけに限られたものであつた。彼女等は、自ら「御清」と称して、將軍の夜伽に侍らないことに誇りを持っていた。もっとも、これは、自らを慰めるはかない自負心と解釈してよいかも知れない。將軍御附の中臈は、大奥内では、きわめて冷遇されていた。長局に部屋を構えることさえ許されていなかった。上臈や御年寄などの内に合部屋をさせられ、その監督を受けていたのであつた。

もっとも、実際には同居していたのではなく、別に、ちゃんと居間や休息所を持っていたのだが、名義上は、どこまでもその部屋子の扱いであった。日陰者扱いであったわけだ。

ついだから、上臈と御年寄のことを簡単に説明すると、上臈とは、御台所の介添役で、多くは、堂上家の姫君たち、御年寄は、多くは旗本の娘、表の若年寄に相当し、大奥内の政務を統べていた。

さて、將軍御附中臈は、上述の通り日陰者扱いを受けてはいたが、日夜親しく將軍の身邊に仕えているのだから、將軍の寵愛が加わると、大奥に対してはもちろんのこと、表に対しても中々の力を持つて来ることは自然の勢いであった。

御附中臈が、將軍の寵愛を得るのは、第一にはもちろん容色であるが、他にも、將軍の心を捉える条件がある。

一つは、その監督者である合部屋の主が、將軍の乳人であるとか、將軍の幼少の頃から侍従してきた人であるとかの場合だ。將軍の氣質、食物、衣服などの嗜好を、すみずみまで知りつくして、その機嫌のとり方まで御附中臈に教え込むため、諸事万端が御意になつて、將軍の心を取りこにし得るわけだ。

二つには、容色と共に才芸を兼ねた場合。

これにあてはまるのは、多くは堂上家出身の姫君たちで、宴席や枕席ばかりでなく、文芸、囲

碁、双六、能楽などの遊芸の御相手を巧みに勤めて、將軍の寵を増し得たのである。

御附中臈が、もし世子でも生んだとすると、その子は御台所の御養いと表向きに披露されるが、生母も、御部屋様とあがめられ、御台所につぐ待遇を受け、御三家をはじめ諸大名から、なみなみならず崇敬された。

將軍の寵愛を鍾めるようになった中臈が、次第に、あるいは自ら権勢欲をもつようになり、あるいは権勢亡者どものそそのかすところとなるのは、きわめて普通のことであろう。そうになると寢物語にことよせて、役人の私行、政治の批判、市中の評判など、聞き込んだことを、やんわりと持ちかけるわけだ。

よほどの人物でないかぎり、愛する者にこんな時に話されて心を動かさないというわけに行かない。まして、徳川十五代の將軍中傑物というほどの人物はそういない。多くは世間知らずの褒められ阿呆だ。かえって刺戟され、氣負って耳をかし、一国の政務を統べる將軍たるの立場を妙に自覚し、いちいちお取上げとなるという次第。

さすがの御側御用人も、これにはほとほと閉口して、この女性共と提携するのに苦心している。

春日の局の威力

乳人志願

三代將軍家光の時代に、大奥に対してはもとより、表に対しても、強い勢力をふるっていた女性^{かすが}は春日の局^{つぼね}である。

春日の局は、美濃^{みの}の土岐氏の一族で、明智光秀に仕えて、勇將の名の高かった齋藤内蔵助^{くらのすけとしみつ}利三の娘だ。名はお福、小早川秀秋の家臣、稲葉佐渡守^{さどのかみまさなり}正成の後妻となった。

夫との間に、正勝、正定、岩松、正利と、男子ばかり四人生んだ。このうち、岩松は幼くして死んだ。

関ヶ原合戦がすむと間もなく、稻葉正成は主君秀秋と衝突して、備前びぜん岡山のくにの城下を退散して、美濃の谷口で、昨日に変わるわびしい浪人ぐらしとなった。小早川家に仕えていた時の正成は、五万石の大名であったが、浪人してみると、かえつてもとの知行ちぎょうがわざわざいして、主取りもはかばかしくない。その当時、五万石をボンと出せるような大名は、先ずなかった。そんな時、お福は、娘時代に奉公したことのある三条西右大臣実条さねだの北の方から、耳よりな話を聞かされた。時の將軍二代秀忠に、世子竹千代が生れ、若君附めの乳人を探しているという。飛び立つ思いで、早速、北の方の夫君実条そえがきの添書そえがきを貰って、京都所司代しよしだい板倉伊賀守勝重いのかみかつしげに面会した。

斎藤利三の娘、稻葉正成の妻という素姓すじやうは、将来の將軍の乳人として申分がなかった。所司代は大いに喜んだが、乳人に上れば、当然、夫と離婚しなければならない。はたして、夫の正成が、それを承知するだろうかと危ぶんだ。

お福は、子供たちの将来を理由にして、正成を説いて、正式に離婚して貰い、子供をつれて江戸へ下った。

一説によると、お福は正成が自分の家に召し使っていた婢女に手をつけたのを怒って、その婢女を斬って京都に飛び出して来ている間に、この乳人募集を聞きこんだというが、どうやら実説らしい。

秀忠には、つづいて次子国松が生れた。すると秀忠夫妻は、どういふものか国松を偏愛へんあいして、

とかく竹千代を粗略そりやくに扱いはじめた。

お福は心配のあまり、伊勢参宮と称して江戸を出て、当時、まだ駿府に存命していた大御所家康の許へ行つて、事情を訴えた。

この時、家康は中々味のある処置のつけ方をしている。

「女が何を言うか」

と叱つてお福を帰した後、何ということなく、ふらりと江戸に出て、

「久しぶりに孫共の顔を見たくなつたから出て来た。一緒に飯を食おう」

と言つた。役人共は家康の前に竹千代と国松の膳を並べて坐らせた。すると、家康は、

「竹千代殿はここでのろしいが、国松は下段へ退れ」

と、下段の間に退げて食事をおわり、そのあとで、

「竹千代殿はやがて將軍になるお人、国松は弟とは言いながら臣列に連る者である。幼い時から区別して育てねば、将来間違ひのおこるものになる」

と言つたのだ。

大御所家康の意志は、いかんともしがたい。以後は竹千代も大事にされ、やがて成長して、三代將軍家光となつた。

弟の国松の方は、祖父家康の跡を貰つて、駿河大納言するがだいなごんただなご忠長となつたが、素行おさまらず、のち

に、城地を召上げられたあげく、詰腹^{つめはら}を切らされて、みじめな最期をとげてしまった。

父母の愛を受くること薄かった家光にとって、お福の母性的愛情はこの上なくうれしいものであったろう。その上、こうして自分の地位をも確立してくれたのだ。家光がお福をその死に至るまで大事にしたことは非常なものであった。身分こそ君臣であったが、情は孝子の母に対するようであった。お福の権勢が大奥全体を蔽うようになったことは、当然の帰結であった。

しかし、お福は、生れつき賢明な女性であったから、私情にまどわされることはなかった。公平仁慈の日常を、ごくつつましくやかに送った。

大奥内の規律の大半は、この当時、お福によって制定されたものである。彼女も、時には、かなり派手に政治の表面に動いたこともあったが、彼女の場合、それはあくまでも君家万世の一念から出た熱情のためであり、將軍の乳人としての純粋な母性愛の発露と見るべきであろう。

伸びる干渉

寛永六年、後水尾^{じみずのお}天皇は、ふだんから帰依しておられた大徳寺と妙心寺の僧侶に、紫衣^{しえ}出世^{しゅっせ}のことを勅許された。